

栗南瓜

森岡 正作

稻架立ちて

曼珠沙華平家の裔と聞けばなほ
根性の座つてゐたる栗南瓜
退屈な正論よりもラ・フランス
曾孫より相撲の好きな生身魂
猪鼻城まづ秋の蚊を迎へ擊つ
模擬天守とや鶏頭の屹立す
空襲の碑にせめてもの柿たわわ

千葉例会吟行三句

十月ともなると周辺の田圃は稲が
みな刈り取られて、風の色もなく殺
風景な感じで物足りない。登四郎先
生に「稲架立ちて畦あたらしく匂は
しむ」という御句があるが、今は稲
架のひとつもない。御句は畦を歩い
ていると、天日を十分に吸つた稲束
が甘く匂うようだ、という意味であ
ろう。他に「稲架立ちてよりの夜道
を怖れけり」もあるが、稲架のある
景はもはや日本の農村の懐かしい風
景と言えるのである。
思えば稲架を組み、そして解くの
は重労働であり数人の手伝いを要す
るもので、昭和の大家族ならまだし
も、現在の少子高齢化社会における
農村の後継ぎ問題を抱えては成り立
たない。当然の機械化であるが、稻
刈り機を操る人とトラックで運ぶ人
がいればよく、稻穂を大きな乾燥機
に入れると三日ほどで新米が出来る
のである。少年の頃田圃の手伝いで、
畦に座つて食べたおむすびの美味し
かつたことを覚えているが、あれは
稲架から出来たお米だったのである。